

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520759

研究課題名(和文) 近世後期における藩財政像の再構築 - 藩有資産の構造と運用の研究 -

研究課題名(英文) Rebuilding of the feudal clan finance image in the late stage of the early modern times

研究代表者

伊藤 昭弘 (ITOU, AKIHIRO)

佐賀大学・地域学歴史文化研究センター・准教授

研究者番号：20423494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、佐賀藩・松江藩・松代藩・萩藩を事例に、各藩が保有した資産の実態を明らかにした。これらの藩では、藩の各役所や藩主家において資産が蓄積され、その多くは領内の家臣・領民に融資されていた。

また廃藩置県後、明治政府は諸藩が保有していた資産の回収を試みた。その際の府県と大蔵省とのやりとりをまとめた史料を分析し、上記4藩の事例が多く、藩にもあてはまる可能性を見いだした。

研究成果の概要(英文)：In this study, I clarified the actual situation of the assets that each feudal clan held Saga feudal clan, Matsue feudal clan, Matsuyo feudal clan, a bush clover feudal clan in an example. In these feudal clans, assets were accumulated in a person of each government office and feudal lord of the feudal clan, and most were furnished vassal, people in possessing it with. In addition, after establishment of prefectures in place of feudal domains, the Meiji government tried the collection of the assets which various feudal clans held. I analyzed the historical materials that I summarized prefectures of the case and the exchanges with the Ministry of Finance in and found the possibility that the example of 4 feudal clans mentioned above came under many feudal clans.

研究分野：日本近世史

キーワード：日本近世史 藩財政 経済史

1. 研究開始当初の背景

日本近世の「藩」の財政については多くの研究蓄積があるが、ほとんどがその「困窮」「窮乏」を主張し、日本近世史において通説となっていた。そしてそれを前提に、藩を舞台としたさまざまな研究 - 明治維新研究、地域社会研究、藩政史研究など - がすすめられてきた。

しかし藩財政の「困窮」「窮乏」論の基盤は非常に脆弱であった。その根拠としてよく持ち出されたのが、藩が抱えた債務である。諸般は莫大な債務を抱え、藩財政運営に支障をきたした、という主張である。

しかし近年では、田中誠二氏が萩藩の財政を丹念に分析され(「萩藩後期の藩財政」(『山口大学文学会志』49号、1999年など)、赤字状態にあった一般会計(藩の財政担当役人が掌握する会計)とは別に、莫大な資産を蓄積した特別会計(藩主家や藩の諸役所の蓄積金)が存在したことを明らかにした。申請者は、田中氏の研究成果をさらに発展させ、萩藩における特別会計資産の運用実態や、藩内部での特別会計をめぐる財政担当役人の動き(特別会計を一般会計に吸収、など)を明らかにした(「藩財政再考 萩藩を事例に」(『ヒストリア』203号、2007年)。また従来の佐賀藩財政研究における会計史料解釈の重大な誤りを指摘したうえで、その史料を再検討し、同藩にも莫大な資産が既に19世紀に初めには蓄積されていたことを指摘した(「続 藩財政再考 佐賀藩を事例に」(『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』3号、2009年)。さらに信州松代藩の藩政文書『真田家文書』(国文学研究資料館所蔵)のなかからバランスシートに類する史料を発見し、それをきっかけに同藩の財務構造や資金調達手段を明らかにした(「藩財政は「窮乏」していたのか」荒武賢一朗・渡辺尚志編『近世後期大名の領政機構』、岩田書院、2011年)。

以上のように、近年は新しい藩財政研究スタイルが生まれつつある。とりわけ藩の負債だけではなく資産に注目する点は、今後藩財政研究を進展させるうえで非常に重要な論点である。負債が多くても、資産がそれ以上に存在すれば、その藩の財政状況は良好であるといえる。藩が保有する資産の実態を明らかにすることが、藩財政の実態に迫るためには必要であった。

2. 研究の目的

本研究は藩が有した資産の実態を明らかにし、藩財政の「困窮」「窮乏」イメージを打破することが目的である。

そのため藩財政の分析にバランスシートの視点を導入し、新たな分析手法の確立を目指す。もちろん、日本近世の藩はバランスシ

ートなど導入していないが、その分析においては、資産と負債のバランスを基準に、その組織の財政・財務状況を評価するバランスシートの視点は極めて有効である。

また藩の特別会計や資産に注目し、その存在を諸藩の財政関係史料のみならず、令達類などからも明らかにする。さらには藩の財政運営と、当該期の藩領地域経済及び日本列島経済との関係を検討し、財政と経済成長の関連性を考える。

3. 研究の方法

佐賀藩・松代藩・松江藩など財政史料が豊富な藩の事例を検討し、特別会計(藩の経常収支以外の、特定用途のための収支や「へそくり」)や資産の有無を明らかにする。

そのうえで、単純な「藩財政 = 逼迫」という通説を批判し、藩全体で見れば莫大な資産を有して良好な財政状況だった藩が多く存在したことを明らかにし、日本近世社会における藩の経済力を再評価する。さらに特別会計の動向と藩政の展開を関連づけて分析することで、藩財政政策の深化(特別会計を含めた政策立案)や財政官僚組織の整備についても論じる。

具体的に、藩ごとに説明する。

・佐賀藩...これまでの申請者の財政分析を前提として、佐賀藩の資産形成に大きな役割を果たしたと考えられる金融活動(家臣などへの融資)や藩札発行、幕末期に行われた大坂商人への資産運用委託について、『鍋島文庫』の帳簿類や、佐賀藩大身家臣の財政史料などから検討する。

・松代藩...財政運営の中心だった「勝手方」の日記を中心に、財政に関わる「勘定方」「郡方」「内借方」「御元方」など諸部局の日記・帳簿類を分析する(いずれも『真田家文書』)。そのほか松代藩と深い関係にあった城下町松代の御用商人八田家の史料である『八田家文書』(国文学研究資料館所蔵)や、長野県千曲市・長野県立歴史館所蔵の松代藩関係文書を分析対象とする。そのうえで、松代藩の資金調達・資産運用における藩領地域経済の役割について明らかにする。

・松江藩...明和4年(1767)~天保11年(1840)毎年の藩財政収支帳簿「出入捷覧」(国文学研究資料館所蔵『出雲国松江松平家文書』)を中心に松江藩の藩政史料を分析する。また・大阪大学文学部所蔵『山中家文書』を調査・分析する。同家は大坂商人で、松江藩に多額の融資を行ったほか、生蠶など同藩の産物販売に関わっていた。そのため同文書を分析することで、松江藩の財政実態により近づくことが可能である。

以上3藩のほか、萩藩についてはこれまでの研究をもとに、比較検討をおこなう。

4. 研究成果

松代藩・松江藩については保有資産高やそ

の運用状況を解明した。両藩とも保有資産をとりまとめた史料が存在し、かつ運用(貸付)先のリストも存在した。両藩とも藩領内外、とりわけ領内の家臣・領民に資産の大半を融資していた。例として、嘉永4年(1851)、5年(1852)の松江藩保有資産を下に示す。

松江藩嘉永4・5年保有資産

資産保有役所	嘉永4年	嘉永5年
御札座	103,683	109,378
木実方	74,244	62,309
人参方	57,099	50,519
常平方	28,260	28,252
寺社修理方別備	16,326	17,566
御軍用方	10,369	10,505
釜甌方	6,268	6,341
御紙方・雑紙方	3,515	3,195
御勘定所御貸方	1,569	1,741
山方	6,008	6,024
鉄穴方	1,718	1,704
御殺生方	945	875
郷方吟味役	1,554	1,612
御堀方	1,332	1,443
材木方	1,152	1,202
寺社町役所	1,053	1,042
小買物方過料方	1,338	2,123
御船手	610	569
御作事所	669	700
御立山	641	669
御普請方	2,023	2,084
郡方	234	212
御廐	507	510
隠州方	363	363
臨時御普請方	1,705	1,260
御小人方	278	287
御用所	233	230
御道中方	290	328
御鷹掘方	132	123
御武具方	168	170
御台所	204	210
木苗方	107	119

御細工所	86	88
御花畑	33	32
荒木川方	38	38
廻船方	7	5
合計	324,777	313,944

註:単位は金両。

一方萩藩・佐賀藩は、保有資産をとりまとめた史料は残っていないが、両藩とも藩主家のもとに多くの資産が蓄積されていたことを明らかにした。そのうえで、藩が有する二面性(藩領の繁栄(国益)を追究する面と「御家」(藩主家)の存続のために、領民などの負担を顧みず資産を蓄積した面)を描き出した。

また廃藩置県後に明治政府が実施した「旧藩貸付金」の回収実態を示す史料により、上記4藩のような詳細な分析にはまだ至っていないが、多くの藩が資産を保有し、領民などへ融資していたこと、とりわけ鳥取藩など、4藩と同じように豊富な資産を有していた可能性のある藩の存在が確認された。

以上の成果は、日本近世史研究において、単に藩財政研究にとどまらず、通説(財政逼迫)を前提に進められてきた「藩」を素材とした諸研究に修正を迫ることとなる。ひいては、明治維新に貢献した「西南雄藩」の再評価にもつながり、近世日本の近代化について、新たな知見を提示することができるだろう。

また現代の日本では国・自治体の財政危機が叫ばれ、支出削減や増税に関する議論が活発であるが、そのなかの論点のひとつとして、特別会計の取扱や、国が抱える莫大な資産(いわゆる「埋蔵金」)の有効活用(より積極的・リスクを伴った運用など)がある。もちろん本研究は、こうした現代の課題については答えを用意するものではない。しかし特別会計や莫大な資産の存在は、実は近世の「藩」にそのルーツが求められ、その実態分析は、現代の課題を考える際に多くの示唆を与える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

伊藤昭弘「佐賀藩における紙幣発行「米筭」を例に」(『佐賀大学経済論集』45-6、21-48頁、査読有、2013年3月)

伊藤昭弘「松江藩財政に関する覚書」(『松江市史研究』5、1-15頁、査読無、2014年3月)

伊藤昭弘「佐賀藩と鹿島清兵衛」(『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』8、1-13頁、査読無、2104年3月)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

佐賀大学地域学創出プロジェクト編『佐賀学』(岩田書院、2014年3月、共著)

伊藤昭弘『藩財政再考 藩財政・領外銀主・地域経済』(清文堂出版、2014年12月)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.chiikigaku.saga-u.ac.jp/kyuhan.html>

諸藩の保有資産の一端が判明する、明治政府による「旧藩貸付金」回収関係史料を公開している。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 昭弘 (ITOU, Akihiro)

佐賀大学・地域学歴史文化研究センター・准教授

研究者番号：20423494